

東欧圏における技術支援 — ブルガリア支援事例 —

E B R D (European Bank for Reconstruction and Development : 欧州復興開発銀行) による東欧圏の環境技術支援プログラムの一環として、2004年10月より2006年4月までの間、ブルガリアの繊維会社について、省スチームを中心とする省エネルギー技術の指導を行った。

この会社の名前は「SEVT JSC」と言い、織物の生産、反物の染色加工を始めテント、ベルト等の製品の製造を行っている。20世紀末頃には倒産の危機に瀕したこともあったようだが、現在の社長になってからは右肩上がりの成長を続けている状況であった。

指導開始前には、「スチーム配管はキチット下り勾配になっているか」、「スチームトラップはあるべき場所にキチット設置されているか」等、チェックポイントを色々と考えて現地に出かけたが、現場はまるで違っていた。

配管は下り勾配どころか、山あり谷ありなのでこぼこで、スチームトラップについては工程の最終段に付いている程度で、工場全体で20個程度の設置しかなく、適正とは程遠い状態であった。最も驚いたのは、バルブやフランジの周りには保温が全く施されていない状態であった。(この、バルブやフランジの周りの保温問題は、次に指導を行ったマケドニアの工場でも同じ状態で、旧共産圏の工場は全て同じ状態なのかもしれない。)

保温の改善問題を皮切りに一步一步進めてゆき、購入に頼っていたスチームは、貫流ボイラーを入れて自製にし、織機は最新鋭のトヨタエアジェットルームを4台(旧式織機に比して能力は10倍、品質も飛躍的向上が期待でき、今後この増設を積極的に進めてゆくものと期待される。) 取り入れる等、改善状況は著しいものがあつた。更には、工場的大幅なレイアウト変更改造についての提案にも、資金バランスを見ながら、将来是非やりたいという。しかしながら、スチームトラップの増設だけは、ドライスチームとウェットとの伝熱効率の違い等の説明説得にも関わらず「スチームのロスが増えるだけだ」と、どうしてもOKしなかつた。

ロンドンの本部のメンバーも参加する最終ミーティングの際、「スチームトラップの増設改造ができなかつたが、私自身の英語能力がもう少し高かつたら理解してもらえたのではないかと思うと、この点だけが残念だ。」と発言したところ、社長の目の色が変わり「ちょっと待ってくれ。もう一度現場でトラップの設置必要個所を指示してくれないか」となつた。

現場で設置必要個所を指示した後、会議室で「トラップは、少し高価だがフリーフロート型が効率が高くトラブルレスだから、これを推奨したい」といったところ、「ディスク型の在庫があるが、これを使ってはいけなかい？」と来た。

在庫があるのなら、これを使うのに異論があるはずがない。

これで筆者の目指した改善は100%達成されることになり、スチーム使用量は半減することになったであろう。

やる気旺盛な社長であつたことが、筆者にとって極めてラッキーであつた。

偶々、昨年末、バカンスでニュージーランドへ行く途中日本に立ち寄られ、再会の機会が得られたが、「Mr. Fujita の改善は意識改革の第一歩で、これで目が覚めた。その後も改善は進めている」と言う。

改めて、良い社長との出会いの幸せを噛みしめたことであつた。